

ワインディングダンス

放射朗

陽炎のゆるる夏がやつと終わり、秋風が吹き始めていた。水蒸気をたつぷり含んだぼんやりとした夏の風景は、澄み切った秋の輪郭線に変わっている。久しぶりに天気の良い休日だ。

秋名峠に一人で来るのは二ヶ月ぶりだった。付き合っ相手がない時には、一人で走りに来るのに特に何の感情も持たなかったが、いざ恋人が出来てしまつと、澄んだ秋の空気が妙に寂しく感じる。

しかし最近はずとタンDEM(二人乗り)ばかりで、思い切り走ることが出来ずにやや欲求不満だったのも事実だ。今日は誰か来ているだろうか。

峠で走っていると、自然に同じ走り屋の仲間が出来てくる。特に仲の良いのが3人ほど。彼ら3人はよくつるんで走っていた。多分今日も来ているだろう。

両側から木々が茂る森の中のワインディングロード。路面は所々アスファルトが荒れているところもあるが、いつも来るところなので、無意識にいい路面を選んで走っている。

真紅のTL1000SのVツインエンジンは、極低速で気難しいところもあるが、回して行けば怖いぐらいのパワーを後輪一本にかけて路面を蹴っ飛ばしていく。

四気筒のように滑らかな回転ではなく、馬が地面を蹴飛ばすような加速感が俺は気に入っている。

コーナーで一気に向き変えをして深いバンク角を目いっぱい使つて加速しながら立ち上がる。遠心力で身体がシートに押し付けられる。

開いた内側の膝下、ほんの数センチのところを、台風で増水した急流のような路面が過ぎ去っていく。

時折路面の隆起が微かに、膝カップでガードされた膝をかすっていく音が聞こえる。何度か四輪に追いつき、追い越すことを繰り返す。

ワインディングロードでバイクに追いつかれた四輪には三種類の行動パターンがある。

第一にあっさり道を譲るパターン。第二に無視して走行を続けるパターン。そして第三に加速して振り切るつとるパターンだ。

第一のパターンは中年から上の男性ドライバーに多く第二のパターンはバックミラーなんかはながら見ていない中年女性ドライバーに多い。

第三は当然だが若い血気盛んな男のドライバーがほとんどだった。

ただ、血気盛んなのは結構だが、たまにワインディングを走る程度のドライバーは当然常連のバイクを振り切る事なんか出来るわけがない。

四輪と二輪の性能差ではなく、技術の差で。

そんな時はこつちも少し困ってしまっ。

下手にがんばられて事故を起こさせるとこつちにも責任転嫁される恐れがあるからだ。あまり長く自分の前で危つい走りをされるのはまずいから、少し強引でも一気に抜いて引き離すのがこの場合は最善の策だろう。

その第三のパターンが目の前に現れた。

日産シルビアターボ、二百五十馬力のハイパワースポーツカーだ。俺のバイクのヘッドライトを認めると、とたんにアクセルを踏み込んだのがわかった。改造マフラーの極低音が俺の腹に響いてくる。

性能的にはいい車なのだが、しかしテクニクが追いつかないようだ。パワーバンドをきちんと使っていないし、タイトコーナーの立ち上がりでリヤタイヤがパワースライドしたとたんびっくりしてアクセルを抜くからギクシャクした走

りになっている。

こつちの場合には少し強引にでも前に出たほうが、と思っても道幅が狭い区間だから簡単には前に出られない。

遅い四輪のペースで走っていると、後ろから一台のバイクが迫ってきた。

青白カラーのGSX R750だ。

前のシルビアと間隔を空けて走っている俺の前に割り込んできた。そして瞬時に前のシルビアをパスしていった。

カーブミラーで確認したとは言っても、フラインドコーナーで反対車線に入っの追い越しはあまり感心しないな。

少し長い直線で、俺もシルビアを一気にパスしてGSXR750を追っ。

思ったとおり峰岸宏美だった。

女だてらという言葉は差別用語だろうが、あえてそう言いたくなるくらい、軽量七百五十ccとはいえ百三十五馬力もあるハイパワーのモンスターを、自由自在に操っている。

コーナーでフルに倒しこんだバイクの内側の膝を、かすかに路面に擦りつけながら鮮やかに左コーナーを立ち上がったいく。

あいつ、また腕を上げやがった。どこで特訓してきたのやら……。

やや涼しい程度だった下界から、少し肌寒いくらいの風に

変わる頃、峠の小さな公園が見えてきた。

「やっぱり振り切れないなあ。サーキットでかなり特訓してきたのに」

悔しげな宏美がヘルメットを取ると、長い髪が風にあおられてふわりと舞った。

「でもついてくのがやっとだったぜ。随分速くなったよ」

俺もヘルメットを取って、ベンチに座った。

そこには先着部隊の大木和馬と、早坂徹も来ていた。

「今日はあのかわいい娘が見当たらないな。もつふられたのかい」

早坂がマイルドセブンの煙を吐きながら言った。

「それで元気が無かったのかな。いつもならスパッと抜いてくものね」

宏美は自動販売機で買って来たホットコーヒーのニップルを引き開ける。

「あいつは試験なんだよ。おかげで久しぶりに攻めに来れたわけ」

俺はそう言って腕時計を見た。

まだ八時過ぎだ。すがすがしい秋の好天の一日は始まったばかりだ。

「俺はもう一本行くけど、ゲバラさん一緒にどう？」

和馬がカワサキZX9Rのエンジンをスタートさせた。

「いいけど、俺の目の前で寝るのだけは勘弁な」

俺も再びTLのエンジンに火を入れる。

「あたし達は少し休憩しているから気をつけてね」

宏美はベンチに寝ころがって、左手だけを振って言った。

あの二人はひょっとしてできているのだろうか。

そういう問題に疎い事には自他ともに認める俺だが、あの二人を見ているとなんとなくそう思えてくる。

いつも二人で居るようだし……。別にいいけどな。

公園の駐車場を出ると、道はすぐに二手に分かれる。

左の方は狭いタイトなワインディングロードで、右の方が少し広めのハイスピードコースだ。

ふもとに降りる道はそのハイスピードコースの途中にある。

両方の道は先のほうで合流しているから約10分で一周して帰ってくる事が出来る。いつもなら狭い方の道は使わずに、ハイスピードコースを交差する国道まで走り、また引き返してくるのだが、和馬は左手で合図をすると、狭い左側のコースへウインカーを出した。

まあいいだろう。こちらのコースの方がスピードが出ないから後追いするには楽だ。こんなタイトなコースは大型のバイクではパワーをもてあますし、切り返しが重くて速く走るのには不利だ。

和馬はもう一本行くけど、ゲバラさん一緒にどう？」

やや下りでもあるし、二百五十CCのスポーツバイクの方が速く走れるくらいだった。和馬はそんな難しいコースを、強引にバイクを寝かせながら一見軽やかに走る。ついていくのは難しくは無いが、立ち上がりでは一瞬離されてしまう。

その分をコーナーの突っ込みで取り戻す事になる。そう言えば先日和馬はタイヤがもう擦り切れてきたと言っていた。新品に換えたのだろうか。

深々とバンクさせるその走りには危うげな感じは微塵も無かった。

国道に合流ししばらく行ったところで再び右折してハイスピードのワインディングに入る。入り口から少し行ったところで二台のバイクが止まっていた。

いつでもスタートできるようにライダーは跨っている。このコースに入っていくバイクが速そうな四輪を待っているのだ。

俺達を通り過ぎると、予期した通り後ろのほうでエンジンをスタートする音が聞こえた。車種は確か宏美のGSX Rと色違いの同タイプ、それともう一台ははっきり確認できなかった。

和馬のペースで後ろを走る俺に、しばらくすると二台のバイクが追いついてきた。すぐに戦闘体制にはいることも無く

間隔を開けてついてくる。

こちらの腕を値踏みしているのだから。和馬も後ろの二台に気付いたようだ。

アクセルを開けるタイミングがやや早くなり、コーナーへの突っ込みも厳しくなってくる。若干登りのコースだからパワーのあるバイクが有利だ。

和馬のペースもそんなに遅いわけじゃないが、後ろの二台は余裕でついてくる。

初めて見る彼らは結構腕が立ちそうだった。

後ろのバイクのエンジン音が、さらに甲高くなってきた。いよいよ勝負に来るつもりらしい。

右のコーナーで一台目が俺の前に割り込んできた。GSXRの方だ。

良く見ると、七百五十じゃなくて最近出たばかりのR1000だった。百六十馬力のモンスターパワーと七百五十CC並の軽い車体は、サーキットで生まれたワインディングの王者だ。

さらにそいつは、次のコーナーで和馬も抜いてぶっちぎり体制に入った。

和馬が必死に喰らいつくが、いかんせん立ち上がり加速が違いすぎる。諦めた和馬が、俺に先に行くように合図をしてきた。

俺は後ろの1台を引き連れたまま、和馬の前に出る。後ろのバイクは俺のT1と同じくVツインのようだ。

バックミラーに大きく写ったそれを見るとドカッティ916、イタリアの高級品だった。

性能的にはそれほどかわらないが、向こうがやや上というところか。

とりあえず後ろのドカッティは考えない事にして、前を行くGSX R1000を追い詰める。

それまでは7000回転弱しか回していなかったが、此処からは本気走りだ。

回転計の針は嬉しそうに躍り上がり、レッドゾーンの直前の10000回転を刻む。実際、バイク自体の性能で言えばGSX R1000にはかなわないだろう。

だが、問題はライダーの腕だ。そして同じくらいに重要なのが、どれだけコースに慣れているかだ。

走りなれていないコースを限界走行する事は無謀を通り越して自殺行為である。

前に行く彼も、腕はなかなかの物だが、やはりコースを知り尽くした俺達とは安全マージンの取り方が違ってくる。

俺達より少しだが安全の度合いを大きく取る必要があるのだ。

コーナーの突っ込みでも限界より低いスピードで入り、先を見通してからパワー掛ける走りになっている。

感情に任せてむちゃをしないところはむしろ感心するくらいだ。

下手なやつほど後ろにつかれると実力以上に無謀な走り

になってくるものだから。

バックミラーで見ると、後ろのドカッティとは少し差が開いたようだ。

和馬はコーナー一つ以上開いてしまったのだらう姿は見えなかった。まあ転倒しているという事は無いだろう。

さあどうするか。突っ込みで無理をしない彼の前に出ることはそれほど難しくは無いが、前に出ても振り切る自信はない。ハイスピードコースの此処で振り切るには、TLのパワーではちょっと無理がある。結局俺は彼の前に出る事はしなかった。

後ろでつかず離れず、華やかな走りをする彼とダンスを踊りつづけた。

公園の駐車場に入る。

GSX-R1000の男は、ヘルメットをとっても傍に止めた俺と目をあわせようとはしなかった。こ機嫌斜めのようだ。

長髪を後ろで束ねた、まだ若い男だった。やせていて、背はあまり高くない。まだ子供っぽい雰囲気が残っていた。

グレイとイエローのツートンカラーの皮つなぎを着ている。

TLと同じだが、本家のイタリアンレッドが似合っイタリア製のドカッティ916がするりとやって来て俺の横に止

まった。

その後でしばらくしてやっと和馬が到着した。

「やあ、こんにちは。オタクのT-1速いね。ここの常連さんかな」

ドカッティの男が白いシンプルなヘルメットを取ると話し掛けてきた。

「こちらは俺と同じくらいの年配で、背の高い男だった。

「下原さんはここでは最速なんです。ライトチューンのT-1だけど、どんなやつが来ても負け無しなんだから」

俺が答える代わりに、横から和馬が口出ししてきた。

「俺達は主に東北の背振山周辺で走っている者なんだ。俺は斎藤。そっちは笠井、よろしく」

斎藤と名乗る男が右手を突き出してきた。

俺は一瞬握手と気付かなかった。

それでもすぐに気を取り直して彼の右手を軽く握った。気障なやつだな。

笠井と言つ男は相変わらずこっちは見ずに横を向いたまままだ。

「こいつの事は気にしないでくれよ。あなたのT-1を振り切れなかったんでいじけてるだけだから」

斎藤の言葉にはんの少し顔を赤くして、笠井が振り向いた。「もう一度走ればぶっちぎりたい。初めてのコースで無理する

やつはただの馬鹿だ」

やはり性格はまだ子供っぽいところがあるな。

でも走りは落ち着きたいいい走りだった。挑戦されたらもう一度走ってもいいかな。

俺のやる気を見透かしたのか斎藤がなだめるように言い出した。

「まあまあ、笠井、つっぱるなよ。俺達は別に他流試合を申し込みに来たわけじゃないんだから。実は話せば長くなるんだけど、俺達のホームコースに速い四輪が一台入り込んできてね、俺達は全滅。この笠井が何とか対等に勝負してただけど、クラッシュして敗北。それ以来その車は来なくなつた。先日やっと笠井のバイクも新調したしこっからでリベンジしたくて探し回っているってわけなんだ」

徹と宏美は少し離れた場所で興味深げにこちらを伺っている。

速い四輪という言葉で、ブルーインプの姿が俺の脳裏に浮かんできた。和馬も同じ思いだったのだろう。

「それ多分青いインプレッサWRXの事じゃないのかな」
和馬がそつ言つと、斎藤の顔が嬉しそうにほころんだ。

「そうそう。やっぱりここにも現れてるんだ。最後に見たのはいつかな」

話している和馬たちになつと手を振って、俺は徹達の休んでいるベンチに歩いていった。

彼らのリベンジには興味無い。そんなに熱くなつては楽しくないだろう。わざわざ他の峠まで探しに来るなんて。

「いま宏美と話してただけど、今度みんなで飲み会やらな
いか。ワインディングチーム・ゲバラの誕生を祝つて」
徹の話はそれほど唐突とは言えなかった。

今度一度みんなで飲みたいな、なんて話はほとんど会う度
に言い合つていたのだから。でもそれは決して実現しない夢
のような話だった。

みんな仕事などに忙しかつたし……。
それに、バイクを降りた俺達には話をするような共通点が
あるとは思えなかつた。薫の出現が、その夢のような話を現
実の物にする後押しをしたのは確実だ。

「いいけど。チームゲバラつて名前を改めるのならな」
徹の座つたベンチの横に腰を下ろす。

「やつと本当にみんなで一緒に飲めるね。いつになるのか当
ても無く待つていた田妻があつたわ。詳しい日程はあとでね。
薫ちゃんの都合も聞かないと、だしね。それじゃ、あたしは
もう一本行つてくるわ」

フルフェイスヘルメットをかぶる為に宏美が髪を後ろで
結びながら言った。

ヘルメットかぶる度に髪に顔の面倒も見ないといけないんだ
から女性は大変だ。

「気をつけていつてきな」

徹が声をかける。

俺もひとつ手を振つて送り出してやつた。

次の週の日曜日、居酒屋に集まつた彼らの顔はいつも峠で
見るのとは随分違つて見えた。俺も彼らには同じように見え
ているのだろうか……。

徹は背広姿。宏美はタイトなOLスーツ、和馬と俺はジ
ーンズ履きのラフなスタイルだ。そして薫はミニスカートから
の伸びやかな足を惜しげもなく披露していた。

「薫ちゃん結構飲みそうだね。わりと強いほうじゃない？」
全員分のビールを注文したあと、徹が上白使いで言った。
「えへへ。わかりますか。割とビールは好きなんです」
薫も嬉しそうにしている。今日は言葉使いが普通だ。
二人でいるときの、あの変な大阪弁は出てこなかつた。

「それでは、長年彼女がいなくて寂しい思いをされてきたゲ
バラさんにはじめての彼女ができた事を祝しまして乾杯と
行きます。乾杯」

徹の首頭でささやかな宴会が始まつた。

ちよつと塩味がきつい枝豆は、みんなのビールをあつとい
う間に空にして、次々に新しいジョッキが運ばれてくる原動
力となつた。

多分そのつもりで、料理は全部少しだけでも塩味がきつ
くなつてきているだろう。

「でも下原さんが今までもてなかつたのはちょっと納得いかないなあ。和馬ならわかるけど……」

「そう言う宏美もやや酔いが回つたのだからか目元が少し赤くなつてきていた。」

「ひでえなあ。宏美さん。俺、わりともてるんだぜ」

和馬はから揚げを噛み千切りながら不満を口にする。

「まあ、誰でも良いつてのなら彼女作るのなんか簡単な事かもしれないけど、やっぱり俺は面食いだからね。宏美位の美人が、薫くらいにかわいくないと食指が動かないんだ」

そんな話をしてる横では、徹が薫に話し掛けていた。

「ねえ、薫ちゃん。何でまたゲバラなんかを好きになつたのかな。後学のために聞かせて欲しいんだけど」

「なんでかな。バイクが格好よかつたからかなあ」

薫の返事にむつと着た俺は一言いつてやろうとしたが宏美達との話で忙しく聞き流すしかなかった。

「バイクかあ。そうだね。ＴＬは格好いいものね。でも俺の

C B Rの方がもつと格好いいよ」

なんてやつだ。徹の奴、人の彼女に手を出したら承知しないからな。

バイクでは遅いくせに女には手の早い奴なんだな。

「でも、あたし赤いバイクが好きなんです。オレンジ色はちよつと趣味じゃないなあ」

「そうそう、それでいいんだ。適当にあしらわれている徹の

悔しそうな顔を見ると酒の酔いも手伝つてすごく愉快になつた。

「そう言えば、こないだのドカッティの連中はブルーインプと会えたのかな。和馬何か知らないか」

徹が話題を変えた。

「いやあ、詳しい事は聞いてないんですけどね、先週走りに言つた時、知り合いがGSX R1000の割れたカウルの破片を見付けたつていつてたんですよ。あいつのかどうかが知りませんけど……」

和馬がタバコを出して火をつける。

「あいつのじゃない事、もしあいつのであつてもたいした怪我でない事を祈つて乾杯」

和馬が自分で締めくくつた。

「どうでもいいけどタバコは止めてよ。煙たいわ」

宏美が抗議する。

「居酒屋ですよ、ここは。まわりでも皆吸つてるじゃないですか」

和馬の言つのも一理あるが、俺も宏美に同感の一票を入れる。徹も胸ポケットのライクに手を伸ばしたが、その手をテーブルに戻して指でこつこつ叩いた。

「よつし。それじゃあみんなたくさん食べたところで、カラオケに行こつぜ」

普段の俺らしくも無くリーダーシップを発揮して、みんなに一次会の終了を宣告した。

カラオケボックスに場所を移すと、皆レパトリーの曲の中から何曲かつ披露した。俺は最近お得意の浜田省吾を二曲歌い、薫は俺の知らない最近の歌手の歌を、身振り手ぶり合わせながら歌った。

トイレに席を立つたとき、用を済ませて戻ろうとしていた俺を、トイレの入り口で待っていた宏美が呼び止めた。かなり酔っているみたいだ。壁に寄りかかってこっちを見ている。

「大丈夫かい？」

側による俺に宏美は抱きついてきた。

「おい、しっかりしろよ」

いったいどうしたんだろう。それほど飲んでいるようには見えなかったけど。

「薫ちゃんかわいいね。良かったわね。いい娘が見つかった」

宏美はそう言っただけで俺の胸に頬を擦り付ける。

「……好きだったんだから。あたしだって」

あっけに取られている俺に、宏美は小さく言っただけで離れた。そのままふらつく足取りで女性用トイレに消えていった。

喧騒渦巻くボックスに戻った後は、その事はしだいに気にならなくなり、忘れていった。俺も酔っていたし、周囲の雰囲気は最高だったし、細かい事を考える場面じゃなかったから。もし、薫に出会っ前に宏美に告白されていたら、多分そんなり付き合っ事になっただろう。

今まで特別な感情は持っていなかったが、顔も身体も偏差値65は行くかといくらに素敵な女性だ。

どうせ俺なんか見向きもされないとあって、今までわざと考えないようにしていたかもしれない。自分自身の感情を……

でも今は薫がいる。俺には薫がいるんだ。

俺は濱田省吾の曲を熱唱しながら自分の中でそう踏ん切りをつけた。

二次会をお開きにしたのは十一時を少し回った頃だった。

未成年じゃないとはいえ薫はまだ学生だ。十二時までには帰らせないといけないだろう。

繁華街の近くのバス停まで五人で歩いた。

「宏美さん大丈夫かな。一人で帰れるのかな、タクシーの中で寝ちゃいそうだけだ」

手を貸そうとした徹を断って、一人で歩く宏美を見ながら、和馬が言う。

「方向が同じだから俺が送ってくよ。大丈夫、部屋には上がらないから」

徹と宏美が同じ方向。俺と和馬と薫は共に逆方向だった。

バス停でタクシーに乗り込む宏美は、最後に俺を見て少し笑ったように見えた。

すぐに見えなくなっただけから本当に笑ったのか、泣き顔だったのか、はつきりしないが、俺はどっちでもいいと思っ事になっ

した。

「じゃあ、俺、ラーメン食っていきますから……」

和馬は俺達に気を利かせて、足早にいなくなつた。

「もつと遊んでいたかつたのに、終わりはあつけないもんやな」

今日初めて薫の変な大阪弁が出た。

「おまえが学生じゃなかつたら朝までだつて付き合つけどな。いくら明日休みと言つても午前様はまずいだろ」

酔客を乗せたタクシーがひっきりなしに通る大通り。

その歩道橋を二人で上つた。

飲み屋街では金曜の十一時過ぎなんかまだ早い時間帯だ。

もう一軒いこうなんて騒ぎながら大勢のグループが階段を下りてくる。薫がその人ごみに押されてふらついた。

そして俺の肩にしがみつく。

男達を通り過ぎた後、俺は薫の身体をきつく抱きしめた。

細い腰をぐいっと引き寄せる。

上を向いて待つ薫の半開きの唇に自分の唇を重ね、人目も気にせずお互いの舌を絡めあつた。薫の舌はびっくりするくらいに熱かつた。

「あたし本当は悪い娘なんよ。午前様になる事なんか全然珍しくないんやから」

薫の目線の先には華やかなネオンの看板がピンク色の光を放っている。俺も限界だ。

紳士ぶるのもいいかげん飽きた。

俺は薫の手を取って、ピンク色のかわいい看板がかかっている入り口に向かつた。

今からだとお泊り料金になります、という受付の声も意に介さず、それで結構と大急ぎで部屋に向かつた。

二人で服を脱いで、二人でシャワーを浴びた。

薫の肌は滑らかで心地よかつた。喘ぐ声も変な大阪弁だつたのは、後になって思えばおかしく思えたが、その時には全くとではなかつた。

気にしている余裕もなかつたという事が。

薫は初めてじゃなかつたが、お互い様だ。別に気にすることではなかつた。

「このまま朝がこなければ地球が滅亡してもええわ」

軽い毛布に包まれた二人。薫の頭は俺の左腕の上だ。

「俺も同感だ」

静かな夜だつた。不思議と車の通行音も人声も聞こえなかつた。

世界の終わりが来たとしたら、今なら歓迎できるかもしれない。薫と二人で終われるのならば……。

なだらかな斜面の芝生に寝転がった俺の顔に、花びらが落ちてきた。ふと左腕を見たが、そこに薫のかわいい寝顔はなかつた。黒い大きなアリが一匹はっているだけだ。

春の太陽が淡く周囲を染め上げている。薄緑の風景の中を

黄色い蝶が二匹絡み合って飛んでいた。

薫の夢を見るのもう何度目だろうか。
いいかげん忘れた方がいいのだろうか……。

遠くからバイクの排気音が聞こえてきた。四気筒の音だ。
高音のややきついその音は千CC以上ではないな。
七百五十か、六百かもしれない。

すぐにスズキGSX R750の青いカラーリングが左
コーナーを抜けて、こちらに向かってくる。パーキングに入
るつもりだ。

俺は起き上がってあぐらをかいた。ヘルメットとレーシン
グスーツのデザインで宏美だというのはすぐにわかった。

ブレーキターンで鮮やかに俺のT.Lの横につけると、宏美
はヘルメットを取って俺を見た。

宏美とは一年ぶりだ。薫が死んでから俺自身ここにくるの
は初めてだから。

あの飲み会以来になるかもしれないな。

薫の事で慰めの言葉なんかを聞くのは嫌だ。

薫は死んだけど、俺の心の中で今でも生きているんだから。
俺はそう思いたいのだから。

そんな俺の気持ちを通じたのかどうか、知る由もないが、
宏美は一言こつ言った。

「シャル ウィー ダンス？」

宏美が笑いかける。それは俺を救ってくれる笑顔だった。

「いいとも！」

俺も笑顔で答えた。

そして、ワインカラーのヘルメットを取り上げ、それに積
もったピンクの花びらを左手で振り払った。

ワインディングダンス3

完